

### インタビューで大切にしていること

- ★親を責めない
- ★裏側にある情報をいかに引き出すか
- ★親からの情報を100%では聴かない
- ★親の言う通りには行動しない
- ★両親の性格傾向もキャッチしていく

※HPC法人養子家庭支援センター

## (6) 訪問支援と家族支援


### 訪問支援は家族支援

- ★依存関係になっている親子関係のバランスをとっていく。
- ★他の兄弟たちの状況把握とフォローの実施。

※HPC法人養子家庭支援センター

### インタビューでの見立てポイント

- ★暴力の質（タイミング・対象・時期・期間等）
- ★自傷行為の有無
- ★独り言
- ★周辺の音などの気になり方（被害妄想的要素）
- ★こだわり・強迫観念
- ★e!c



※HPC法人養子家庭支援センター

## 講義風景①



## (4) 家族関係への介入について

### 家族（親）に理解してもらうこと

- ★自分の子どもにどのようになってもらいたいのかの具体的なイメージ。
- ★上記を元に両親で意思の統一をはかってもらう。
- ★訪問中は刺激を加えていくことにもなるので、気持ちの浮き沈みが生じる可能性も理解してもらう。  
（短期的な部分で状態が良化した、悪化したと一喜一憂しないような状態に持って行く）

※HPC法人養子家庭支援センター

## 講義風景②



## (5) 本人の心理的状态の理解と葛藤


### 当事者たちの葛藤

★新しい情報が思考の中に割り込んでくる

↓

経験値が少ない中思考しているので信頼していいのか、悪いのかをかなり葛藤する

⇒ここの葛藤が重要になってくる



※HPC法人養子家庭支援センター

図表 3 (合同研修前期 - 研修生レポート／一部抜粋・語調整)

講義・演習①「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」

(レポート1) アウトリーチに関する全般的な内容や基礎を学ぶことが出来たことが大きい。ケースマネジメントについては、地域生活支援のための手法であること、フォーマル＝生活支援やインフォーマル＝地域での生活支援という視点は新たな気づきであった。チームを作り調整し支援していくことは簡単なことではないが、支援する当事者の自立のためにはこれから必要な取り組みである。

ケースマネジメントの展開において、ニーズを把握し計画を立てアドボカシーを経て計画を実行し評価を行う。この一連の流れはビジネスの現場で行うPDC Aサイクルと同じであるので、普段行っているPDC Aを意識して今後アウトリーチを実践していきたい。

ジェノグラムやエコマップはこれまであまり使用していなかったもので、今後は関係者との協働を意識してわかりやすくまとめて使用していきたい。

(レポート2) 本研修の一日目に、社会福祉の歴史及びアウトリーチのはじまりについて学べたことは、今後の研修を受講する際の良き心構えとなりました。特に訪問教師の活動内容にある「子どもの〇〇を理解してもらおう」代弁者としての役割について、勉強不足のため今までは考えていませんでしたが、非常に必要性を感じました。子を思う親だからこそ、今の状態が許せない、信じられない、…と思うのは当然のことで、その場は感情的になりがちだと思います。あえて第三者が「代弁者」という形で介入することで、感情的にならず冷静に話し合いができ、環境を整えていくことができるのだと感じました。

また、グループワークにて、それぞれの機関の専門性を持ち寄りながら支援計画を立てられたことによって、「こういう場面で力を貸してくれる機関はないだろうか…」という問いに対し、すぐに答えが出て、理解を深められたことで、今後活かすべき知識として身につきました。

(レポート3) 社会福祉とアウトリーチを学問的な見地から検証した内容だった。

印象に残ったものとして、アウトリーチやケース(ケア)マネジメントは、ストレングスの視点が重要だということだ。特に、医学モデルの欠点や失敗ばかりに目を当てる支援は、当事者のエンパワメントに繋がらないと指摘されていた。

関わり方としては、一緒に協力して取り組む姿勢や褒めること、共有できる話題を用意することが大切ということだ。また、支援計画を考えるにあたって、「誰が」「いつ」「どの様な支援を実行していくか」を具体的に決め、①「情報共有」②「共通認識」③「目標設定」④「役割分担」の手順の大切さも強調していた。

ただ、個々の支援機関の連携が取れていない場合が多く、当事者がたらい回しにされ、有効な支援が受けられないこともある。適切に「つなぐ」ことの必要性を深く学んだ。

(レポート4) 支援を実施する際には、支援を必要としている当事者が本当の意味で地域社会の中で自立して生活するというを具体的にイメージした上で、何が必要か、どのように支援していけばよいかを検討すべきだということに、訪問支援の歴史やケースマネジメントが必要とされるようになった過程を学ぶことを通して、気付かされた。

また、支援計画の立て方について、当事者やその家族、生活環境など同時進行で様々なアプローチをする必要があることが学べた。何よりも、それぞれの専門分野をもつ研修生の方々とグループワークをすることで、自分では思いつかない考えを聞かせていただくことができ、自分一人で何から何まで支援しようとするのではなく、各関係機関がそれぞれの得意分野を持ち寄ることで、支援の幅がぐっと広がるということや、各関係機関と情報の共有を超えて、どのような支援計画を立てるのかまで共に検討し実行することの意義を実感することができた。

## 講義・演習②・③「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ」

(レポート5) この講義はとても刺激的なものであった。講義内で自身の実践を振り返り、反省と発見により一喜一憂を繰り返す場面が多々あった。それほどまでに、スチューデント・サポート・フェイスの実践は学ぶものが多く、子ども・若者への見方や支援観を再確認するものであった。訪問支援においての事前準備の重要性をグループワークにて痛感し、アセスメント・見立ての精度を上げていくことに関しては、チーム体制でそれぞれの専門分野を活かして見立てを形成していくことが重要になってくると感じた。(そしてそこには相互の信頼関係と協働の意識が必要となってくる。)

アセスメント指標は非常に有用で、本人の状況や漠然とした変化を客観的に評価し、周囲と共有していくことは支援の導入部分や展開において欠かすことができないものだ。困難ケースほど、ここも問題あれも問題として考え、途方に暮れがちだったのだが、バランスが崩れているところを見極め、そこを集中的にケアすることで本人たちの自己回復を促していくという意識をもっと強く持って、意図的に関わっていく必要性を切に感じた。是非当法人にも周知したい指標だった。

対象者のニーズを絞り込んだ訪問というものも、アイデアが満載で大変勉強になった。丁寧に丁寧に対象の方と接し、共にスモールステップを踏んでいくことがその後の経過をいかに変えていくか、日々の実践を振り返ったくんだりであった。個人情報や同意書の関係もあり、どうしても支援の発想が既存の施設やツールに対象者を当てはめて展開しがちであったため、対象者に添ったかたちでの支援というケースワークの基本に立ち返った。対象者に寄り添い伴走しながらも、コーディネーターとして同時平行的に関係機関の関わりを持たせていくことも、支援の安定期～展開期にかけて今後意識的に行ってきたい。支援者側が見通しと目的意識を持って対象者に接していくことは、支援の大前提なのだ。講義を聞き終えた後は、自身のなかに使命感が溢れ、今後どんなケースがあろうとも、諦めず最後まで対象者に寄り添っていこうという決意に燃えていた。

(レポート6) アウトリーチまでの事前準備は、適切なアプローチや、発展的な支援につながるような仕掛けをするために役立つだけでなく、当事者や家族の安心・安全を守ることにもつながっていると感じました。そしてアウトリーチやトレーニングメニューの方法も一つのものに固執せず、当事者のニーズや興味関心のあることを基にしながら関係を築き、少しずつステップアップできるように支援していく、雑談に見えるような中にも間接的なメッセージをこめるなど、細やかなところにも“本人にとってどのような意味を持つか”という視点や配慮を持って支援をしていく姿勢がうかがえ、普段の実践においてもより強く意識していきたいと思いました。

また、当事者・家族や関係機関から相談が入り、ある程度事前情報が得られたところで、アウトリーチが必要かどうか、他機関との連携の可能性やタイミングの判断をどうされているのかもより詳しくお聞きしたかったです。特に虐待が疑われる場合や、障がいや有していること、精神疾患で治療が必要な状態であることなどが明らかな場合について、本人の思いとリンクさせながら、他機関との連携の仕方やタイミングを判断する際には工夫が必要なことも多いと感じます。

講義の中で、組織・分野だけでなくライフステージごとの縦割りがあり、社会的自立まで支援できていない現状があったという話がありましたが、ケースに会う中で、支援を受けた経過があっても途切れていることや、高校不登校や中退してどこにもつながっていないことが多く見られることから、課題を感じているところです。佐賀県において行政と連携しながら総合的な支援の体制をつくってこられた話もとても興味深かったです。

(アウトリーチ7) アウトリーチに対する考え方、訪問の事前準備、本人との関係性の作り方、初回訪問の事例等学びましたが、どれも衝撃的だった。これほど細かいステップをふみながら、進んで行きつつ、さまざまなケースにその場で対応する力も同時に備えていかなければならないことを、改めて感じた。

特に、アセスメントでどこまで本人の情報を得る事ができるのか、初回の訪問時にはどのような会話を進めていくのか家族との打合せ等がとても重要であった。本人と会えないことの中にも支援の進展はあり、会えたときにプラスに一步でも進めるために準備を怠ってはならず、支援員の誠実な態度、姿勢が本人の気持ちを動かす鍵だと感じた。

今回のアウトリーチ研修では、訪問時の対応の仕方を学びたいと思っていたが、実際は訪問以

前の段階から始まっていた。初回訪問までにかかなりの時間と深いインテークが必要だと感じた。  
そして、親の思いとは裏腹に、親にいろいろなことを受け入れ、本人よりも（先に）変わってもらおうこと。それによっての本人の家庭での変化を観察していく事で見えてくるものがとても意味があると感じた。  
なぜ、このようなアウトリーチを行わなければならないのか、谷口さんのような決定的な動機が自分には持っていないが、そのような人（生き方）にとっても共感している自分がいた。習ったことの一つでも多く日々の業務で試し、自分を高めていきたいと感じた。

（レポート8）子ども・若者支援地域協議会のようなマクロなレベル～個別支援というミクロなレベルにおいてもネットワークが有効に機能する上で中核的なコーディネーターとしての役割を果たす機関の存在の重要性を学ぶことができた。また、ケースの見方、連携や支援に関する考え方は機関により差異が存在し、連携を進めていく上で相手にとって無理のない形を考え、示すこと（折り合いをつける）、FDPのような評価のための共通言語を活用していくことの必要性について考えさせられた。

特に困難性が強いケースに関しては、機関の役割や機能という支援の枠組みに当事者を嵌め込もうとしても接触そのものが困難であり、支援者が当事者の状況や価値感覚に合わせるという柔軟性や多様なツールを持つことが必要であることを学んだ。そのためには、きめ細かな事前情報の収集による準備とワーカー自身が当事者の多様性に対応していくために、生活経験を拡大していくことが必要であると感じた。

先述のように支援において“問題の改善”に目が向きやすいのと同様に支援の目標も目先のことに捉われがちであることに気付くことができた（学校復帰や医療機関の受診につなぐ等）。しかし、講義の中で触れていたように、それらは“社会的自立”という目標のためのあくまで一過程であり、長期的な視点を持って支援に臨むことの重要性を学ぶことができた。

一機関のみではマンパワーによる制限から関与可能なケースは限られてくる。そこを補完していくためにも既存の資源とのネットワーク形成とともに新たな資源（ボランティア等）を地域の中でどのように開拓・育成していくかという視点が重要であると感じた。

#### 講義・演習④「アウトリーチの技法と当事者に求められる支援者像」

（レポート9）ひきこもりの経過について、本人の視点から説明していただきとても分かり易くありがたかった。ひきこもりの経過を理解した上で、「訪問の仕方」「訪問の視点」「実際の言葉かけ」「注意点」を教えていただいたので腑に落ちた。バラバラであった私の知識が、スッとまとまってきてとてもスッキリした。「ネゴシエーター（交渉人）」という言葉もピッタリだった。対象者・その家族・関係者・支援者それぞれが人間として同等なのだと認め合うからこそ交渉が成り立つと思った。また、心に残ったことは、「引きこもりは将来に対する思考を止めている状態である」ことであり、それを「再開」してもらう事が大切であり、目的となるという言葉だった。本当にそうであると納得した。「再開」のために何をどのようにサポートしていくのか、現実にはできることは何かを深く考えるきっかけとなった。

（レポート10）クライアントとの接触がなくとも、クライアントを取り巻く環境に関わるということは、目には見えませんがクライアントの生活環境に変化が生じているということだ。その反応や態度に変化を読み取る技術は支援者にとって必須であり、その技術は、クライアントをストレングス視点で捉えていく積み重ねなのではないかと感じました。それは、インテーク等の事前情報だけに縛られず、「実際にあなたを見て気付いたこと」を丁寧に伝えていく行程が、クライアントの変化を促す作業だと感じたからです。

「理解してくれるかもしれない」というクライアントの期待や不安は目には見えませんが、必ず変化があるという視点を支援者が持つということは、私の今までの「促す」支援手法に「待つ」という視座を与えてくれました。

(レポート11) ひきこもり支援について、相談支援の流れに沿って、支援の際に持つべき広い視点を学ぶことができました。ひきこもりの長期化のスパイラルにおいて「自分の気持ちをごまかすのが上手になる」という当事者の状態の理解をベースにして考えると、家族に本人の状況を理解してもらいやすく、当事者の不安の理解や安心感を持ってもらうための関わりにも明確な軸ができるように思います。アウトリーチのみならず、ひきこもりの相談支援をするにあたり、とても有用な考え方を得ることができました。

(レポート12) スライドがとてもわかりやすく、保護者対応の際に、説明に使ってみたいと感じたものが多かったです。親の対応を中心にした講義は新鮮でした。団体内で、親の対応を担当することも多いので親と協力していくことで経過が全く変わってくることは実感として持っていましたが、上手くいかないところでもありました。河野先生の話聞いて、納得できるところも、伝え方の工夫で習いたいところもたくさんあり、今後団体に帰った後に親の対応を変えて行きたいと感じています。親にしかできないことをこちらがどう伝えて行くか、とても素晴らしい学びをいただきました。

合同研修前期の満足度についてのアンケート結果は図表4の通りであった。

図表 4 (合同研修前期/アンケート結果)

